

一心太助の天秤棒

～前の籠には責任を、後の籠には信頼を 肩に担いで売り歩く～

越谷市議員 白川 ひでつぐ

シリーズ/NO 159号



Web サイト



Youtube



Twitter



Spotify

駅頭は小さなドラマの連続だ！

初当選以来6期22年間毎日毎朝続ける東武鉄道の市内6駅での朝の駅立ちは、通算4300日を超えました。私の日々のツイッターのつぶやきから、転載したものを含め、駅前の様々な市民との出会いや何気ない駅前の風景、市民の日常を通した暮らしへの息遣いをエピソード集としてシリーズでお届けしています。

YouTubeの白川ひでつぐ公式チャンネルの登録者は293名を超えました。引き続き配信を継続していますので、これまでのご協力に感謝し、更にご登録をお願いします。

チャンネル登録



次々と私から市長に紹介を続ける状況がどこの駅でも

今朝の駅立ちは、大袋駅東口だったが、10月19日から越谷市長選挙が始まり、私は福田晃市長を応援した来た。このため、この日は市長と一緒に行動したため、通常の時間より1時間遅らせて午前7時から開始した。(選挙期間中は、市長は選挙運動で毎日朝のこの時間から駅立ちが取り組まれていた)

また、揃いの赤いTシャツを着た運動員も10名ほど参加していたが。(実は私自身は多くの運動員が参加する選挙運動のスタイルを一度も採ったことはない。それは1年中単独か2人で立ち続けているので選挙を非日常にしないと心がけて来た。しかも選挙期間中だけ大勢で、



また声をそろえて、“おはようございます。〇〇をよろしくお願いします。”との行動に対して、朝の静かな時間帯に威圧的に感じる通勤客が多いと判断して、その様にはして来なかった)

更に、駅頭に参加している他の市議会議員も同じ様にTシャツを着ているが、私は通常通りの服装で参加している。それは20日(月)朝せんげん台駅東口で、私も赤いTシャツを来てチラシを配布したのだが、ここでも多くの運動員が参加しており馴染みの市民が私と気づかずに通り過ぎて行くことが頻繁に起こった。このため私だけがこのTシャツを着ないことが承認されていた。通常通りこの駅では旧知の市民の方と挨拶を交わすことが出来、またその市民の方を市長に紹介する場面を多く作ることが出来た。そんな行動がどの駅でも実現出来るのは、私以外の議員はいないのだが。

これは22年間にわたる毎日、毎朝の駅立ちの成果であり、市民の皆さんとの関係性の賜物であることを新ためて感じる朝となった。午前8時過ぎに終了したが、この日は午後1時30分から越谷市議会の議会運営委員会が開催されたため、出席した。議題となっている、私が提案者であるが、議会運営委員会の中継録画(当初の提案はライブ配信だったが、市民に誤解を与える可能性があるとの反対意見が続いたため、録画配信では、と譲歩提案していた)の配信のテーマだ。すでに1年以上このテーマを協議して来たが、自民党、公明党だけが録画配信に賛同して頂けない状況が続いていた。そのため、市民への誤解が生じる事態は発生しない。何故なら協議が一致出来なければ各会派持ち帰るとする方式を採っているし、不規則な発言がこれまでであったことはないし、不測の事態が起これば録画なので編集が出来ると私の発言から、自公の議員もこの日納得して頂いた。これで8会派全員の賛成の中、議会運営委員会も他の4つの常任委員会と同様に中継録画の配信が決定した。(10月22日・水曜日)(裏へ)

福田晃市長の再選が決定した。次点の候補者に18,000票もの大差をつけて



10月26日投開票だった越谷市長選挙では、福田晃現市長が再選を果たした。3人が立候補し、福田晃市長（53,636票）新人の畔上順平氏（35,028票）勝又隆弘氏（3,689票）、投票率は33%の結果となった。

次点の畔上氏との差は18,608票の大差となった。今回の選挙の視点として第1に市民が判断する争点設定が不明確となった事。第2に投票結果からみると畔上氏は自民党支持者の支持に留まり無党派層や子育て世代への訴求力が弱い事。第3に社会の劇的変化が貧困と格差の拡大として市政の隅々まで浸透している現状に対する認識と解決への物語（ナラティブ）の有無だ。

問われるべき課題だったのは、どの候補者を選ぶにしても、人口減少時代における公共施設の再編や公共交通が地域の足として機能が弱いことや、市内の住宅街に限らずマンションでも空き家が増大していることや、八潮の道路陥没で表面化した上下水道の今後の在り方、人口減少や高齢化社会における家族構成の劇的な変化（一人暮らしの高齢者の爆発的増加に限らず、若者の一人暮らしも増えている）、小中学生の不登校は年々増えて続けており年間700人までに達している等。これが市長選挙の最大の争点だったはずだ。そうでなければ勝ったか負けたかに終始してしまい、市民の市政への関与は限定的になってしまう。

現市長が当選はしたが、ますます市政運営の問題は、深刻化し、複雑化し、広域化することは必至であり、どの問題も「正しい」政策を行政による実行では当面の解決策となったとしても、少なくない将来に更なる問題解決が迫られて来ることになる。

その際に最も解決の母体となるのは、市民による新たな地域ネットワークの構築や現状の市民同士の関係性をパブリックの視点で再編していく事だ。そのためには、市長公約を4年

間日常的に検証し、適切と判断すれば市民として推進し、優先順位が低いと判断すれば凍結や撤回を要求することが必要とされている。

（10月26日・日曜日）

環境経済・建設常任委員会の他県への行政調査のテーマは、越谷市ではどうなっているのか

11月4日、5日の両日富山県小松市と石川県金沢市の行政調査に参加する。私の所属常任委員会である環境経済・建設常任委員会の取り組みだ。調査項目は、PFI方式による市営住宅の建て替えについてと下水道事業ウォーターPPPについて。

この調査に先立ち、まず越谷市の現状と調査自治体の先進性を学ぶため、委員会として事前学習会が開催された。この様な学習会は他の常任委員会では実施されてはいないのだが、前期私が民生常任委員会の委員長の際に発案して実施して来た。その際に副委員長だった山田大介議員と協議して実現して来た経緯から、今回この委員会の委員長となった山田議員が引き継いで頂き実現したものだ。

この日は、越谷市の担当課である住宅建築課長と下水道課長から説明をして頂いた。

このテーマで両市は、民間企業との連携、所謂公民連携の形態を採用しているもので、越谷市も市営住宅の建て替えや、下水道事業で今後この方式を採用する予定があるのか等説明と質問が続いた。

特に、先般来八潮市での道路陥没事故から下水道施設の修復に大きな注目が集まっている。

この下水道事業は、高度経済成長期の人口ボーナスによって都心の整備計画が急速に策定され整備が図られて来た。その特徴は、巨大な中央集権的な施設とその管理運営を市だけに限らず埼玉県全域と各市町村を含めた管理、運営として実施して来た。

しかし、時代は人口減少時代に入って施設、補修管理（旧来の耐震化基準をクリアしたり、また古い管路の整備等）についてその資金対応や職員配置が困難となって来ていた。

それでも旧来の巨大施設の維持のため、使用料金の引き上げや各種補助金で何とか対応して来たが限界を既に超えている。千葉を始め地域独立型で分散的な合併浄化槽への切り替えが進んでいる。これは都市機能の構造的な転換として特筆される。（10月28日・火曜日）